

(一社)日中文化事業団会報

(日中交流の絆江戸時代藩校の遺産の旅1号)



藩校旅行 1号 2025年11月06日(木)
(一社)日中文化振興事業団 主催
編集者 胡 金定 理事長
電話 090-3350-8368
E-mail kokintei-1@mpd.biglobe.ne.jp

胡金定先生とゆく「日中交流の絆江戸時代藩校の遺産の旅」(岡山・福山篇)

2025年3月8日(土)～9日(日)、一般社団法人日中文化振興事業団主催の『胡金定先生とゆく「日中交流の絆江戸時代藩校の遺産の旅」(岡山・福山篇)』が実施されました。

参加者：井上一、秦爽、竹田昇・清美、高木優次、増田和俊、古瀬裕功、鴻原森蔵、村田和憲、胡金定、また、中国からの参加者は米鴻賓、蔣艾伶、劉蓉 (参加者13名)

「今回の旅行を記念に参加者の有志から旅行記や感想文を書いて頂き、「(一社)日中文化振興事業団会報」(日中交流の絆江戸時代藩校の遺産の旅1号)に掲載しました。

藩校(はんこう)とは、江戸時代に、各藩が藩士(武士)の子弟を教育するために設立・運営した学校です。藩学、藩学校とも呼ばれます。江戸時代の藩校は、幕末には全国に255校(明治2年調査分)が存在し、ほぼ全ての藩に設立されました。

藩校の主な目的は、藩政を担う有能な人材を育成し、藩の支配体制を維持・強化することにあります。特に江戸時代後期になると、財政難や対外的な緊張の高まりの中で、藩政改革や海防などを担う人材育成が急務となり、多くの藩で藩校の設立が促進されました。

教育の対象は原則として藩士の子弟であり、身分制度が厳格だった江戸時代において、庶民が通う寺子屋や私塾とは区別されていました。

初期の藩校では儒学(特に朱子学)と武芸が中心でしたが、時代が下り社会のニーズが多様化するにつれて、教育内容は拡大していきました。

主な教科目：儒学(四書五経などの古典を通じた人文教養)、武芸(兵法、剣術、弓術など)、実学(医学、算学(数学)、国学、洋学(蘭学)、洋式兵学など。

幕末期には、西洋の学問や技術を取り入れ、近代化に貢献する人材を輩出した藩校も多くありました。

胡 金定

2日間にわたる藩校の旅

井上 一

2日間にわたる藩校の旅、どの訪問地も大変勉強になる旅行でした。最初の訪問地は岡山の閑谷学校。藩主池田光政は幕府の官学である朱子学を嫌い、陽明学者熊沢蕃山を招いて陽明学を藩学としています。胡先生曰く「日本人は陽明学が好き」と。この言葉を実感する旅が続きます。

2日目の訪問地は、山田方谷記念館。山田方谷は農民出身で松山藩の藩政改革にあたった陽明学者。越後長岡藩士・河井継之助が教えをうけにやってくる。河井継之助は、司馬遼太郎の「峠」で有名。昔、山田方谷の「鏡の話」を読んだ記憶があって、うろ覚えだったので記念館の方に聞きましたが、その方も聞いた覚えはあるが詳しくはわからないとのことでした。

山田方谷は陽明学の欠点をよく心得ていて、陽明学の教えを請われても安易に教えることはせず、まず朱子学を深く学ぶことをすすめる。その上でなお陽明学を学ぶことを希望した者にだけ陽明学を講義したといいます。三島由紀夫のことが頭に浮かぶ。

記念館にかかっていた「至誠惻怛」は、山田方谷が河合継之助に贈った王陽明の言葉で、「真心と慈愛の精神」という意味です。

この「至誠惻怛」の精神は、女性門下の福西志計子を通して、「児童福祉の父」石井十次、救世軍の山室軍平、社会的キリスト教主義の中島重らに影響を与えています。中島重の長女中西珠子は昭和から平成にかけて2期参議院議員(公明党)をつとめています。

つづいての訪問地犬養木堂記念館には、宮崎滔天の写真が。宮崎滔天は私の大好きな明治の大豪傑です。宮崎滔天は孫文と知り合うと、すぐに犬養毅を紹介しつづけます。ある宴席で、犬養が孫文に「趣味は何か」と尋ねると、孫文は「革命です」と答える。「他には」と言うと、照れくさそうに〇〇と答えたという。孫文は次の言葉を残している。

「中国革命史の公式記録のなかに、日本の友人たちが果たした、かけがえの無い貢献の詳細が書かれるべきだ」と。

最後の訪問地は、岡崎嘉平太記念館。周恩来は次のように述べ、岡崎はその言葉に感銘を受けたという。

「日本は我が国を侵略し人民を傷つけ苦しめてきました。我々は深い恨みがあります。しかし、中国と日本の間には2000年に渡る友好の歴史があります。戦争による不幸な歴史はわずか数十年に過ぎません。我々は日本に恨みを持っていますが、それを忘れようと努力をしています。これから日中が力を合わせてアジアを良くして行こうではありませんか。」

でも記念館の書棚に、「周恩来秘録」（高文謙著）が置いてあった。なぜここに「周恩来秘録」を置いているの？

「周恩来秘録」は周恩来について、自分の主張を一切出さず、ただ毛沢東に黙って従う定見のない政治家。毛沢東が自分に反対する者に対して残酷なほどに冷徹なことをよく知っていて、毛沢東が言わんとすることを忖度してうまく渡り歩いた風見鶏のような存在であるとしている。うーん・・・。

ともかくも、先生をはじめ同行の皆さん、また準備に奔走された事務長、自動車をだしていただき、長時間の運転もしていただいたKさん・Tさん・Mさんに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

岡山旅行感想文

高木 優次

天気にも恵まれた岡山旅行でした。

犬養毅の生家を見学後すぐに出会った老婦人の顔つきが犬養毅にそっくりですぐに子孫だと気づくほど似ていてとても驚きました。

今は岡山県青少年教育センターとなっている特別史跡旧閑谷学校では清々しい日本の自然が残った素晴らしい跡地だと感じました。他にも山田方谷記念館・岡山藩藩学・熊沢蕃山先生の碑など様々な場所を訪れました。

特別史跡廉塾ならびに菅茶山旧宅では人間学、人文学など学ぶことができました。広島原爆死没者の慰霊碑は広島市にしかないものと思っておりましたが、福山市にもあるのを目にして日本の歴史の苦しみが見え今の時代があるのだと再度深々と感じる事が出来ました。外に広がる街は賑やかでしたが空を見上げると夜空は遠く広がっており星も見えない暗い空でした。

今回の旅行を通して思ったことは、世界の子供達のために自分自身がより深く思索し、精進してまいりたいと思います。

胡金定先生とゆく「日中交流の絆と江戸時代藩校の遺産の旅」

村田 和憲

胡金定先生は甲南大学の教授であり、江戸時代の藩校に深い関心を持ち、研究を続けています。

江戸時代の藩校は儒学、朱子学が基本にあり、中国との密接な関係が見られます。旅は3月8日、JR福島駅の舞昆のこうはら店から出発し、中国人5人、日本人8人が参加しました。

最初に訪れた岡山藩の閑谷学校は1670年、藩主池田光政により創建され、見事な石堀の技術に触れました。日本遺産第一号に登録されています。広島県福山藩の廉塾では江戸時代に活躍した漢詩人菅茶山の業績を学びました。庭の楠木から樟脳の香りが漂い、春の訪れを感じながら往時を偲びました。その後、福山城の北にある福山藩誠之館跡を訪れ、藩校が明治時代の教育のどのように継承されたのかを思い返しました。福山ニューキャッスルホテルの四川料理の晩餐会では、日中メンバーが交流を深めました。

2日目、井原市の芳井歴史民俗資料館では内山完造の生涯に触れました。彼は上海で内山書店を開き、魯迅や郭沫若などの中国文化人と交流しました。また、高梁市の山田方谷記念館では幕末の政治家・教育者山田方谷の功績を学びました。彼が掲げた「至誠惻怛」の精神は、今も人々に受け継がれています。昼食は雲白で豆腐料理を堪能しました。

さらに、岡崎嘉平太記念館を訪れ、日中国交正常化への尽力や周恩来とのエピソード、「田中角栄の日中国交正常化の井戸を掘ったのは岡崎です」に感銘を受けました。

藩校とは別になりますが、犬養木堂記念館にも寄りました。犬養首相は1932年、海軍青年将校が起こした5・15事件で凶弾に倒れました。その後2・26事件が起これ、軍部が台頭し、日本に軍国主義が実権を握り、日中戦争、太平洋戦争へと向かったのです。

最後に、岡山藩校跡を訪れ、藩校が地域の教育基盤にどのように受け継がれたのかを確認しました。

この旅を通じて、藩校の遺産や歴史的偉人たちの功績に触れる中で、人とのつながりや努力の重要性を深く実感しました。儒学者・熊沢蕃山の座右の銘「うきことの猶この上に積もれかし限りある身の力ためさん」に象徴されるように、過去の知恵を未来に生かす意義を学ぶ旅となりました。

追記：鴻原社長、武田さんのご厚意により車を出していただき、三台の車に分乗して、旅を無事に終わりました。若月事務局長には旅行の下見までしていただき感謝に堪えません。

岡山藩校の旅 感想文

竹田 昇

日本各地にある藩校は江戸幕府が全国各地の藩に作らせたと聞いておりましたが、一度も行ったこともなく今回初めて備前の閑谷学校をはじめ各地の藩校跡を訪れることが出来ました。胡金定先生の旅に参加しない限り藩校を訪れることはなかなか無く、貴重な体験をさせて頂きました。

さて、今回の旅行において最も印象に残っているのは、私事ではありますが僕の従兄弟が福山に住んでいて、数十年ぶりに会うことが出来たことです。胡金定先生に僕の従兄弟が福山市内で銃砲店を営んでいると話をしたところ、先生が銃にとっても興味があるので是非連れて行ってほしいと言われ、本当に久しぶりに再会を果たすことが出来ました。僕が小学生の頃に母の実家に遊びに行っていた以来の再会でしたが、お互いにすぐ誰とわかる位ですぐに打ち解けることが出来、タイムスリップすることが出来ました。その頃は亡くなった伯父さんが銃砲店を経営していて、広島県警の警察官に射撃を教えていました。近くのクレ射撃場に連れて行ってもらったりしました。山に猟に行ったら留めた日本の国鳥である雉(キジ)を内緒で食べさせてもらった事も思い出しました。店内のシャッターに厳重に保管されているライフル銃や空気銃をたくさん見せてもらって、胡金定先生も興味津々で見えておられました。

藩校とは何の関係もない話になってしまいましたが、胡金定先生が背中を押していただいたおかげで従兄弟と再会し、又、米先生やその生徒さん達と日中友好交流をすることも出来ました。やっぱり旅の楽しさは人との出会いや思いもしないハプニングにあると実感しました。

(思いもしなかったハプニング)

銃砲店に向かうタクシーの運転手がとんでもない高齢者で、カーナビに住所を入れて向かったのですが、袋小路に迷い込んで狭い道に突っ込んで、前にも後ろにも動けなくなり、そのタクシーと運転手のおじいさんを見捨ててそこから銃砲店まで歩いていくという、とんでもないことが起こりました。笑笑笑・・・

日中交流の絆と江戸時代藩校の遺産の旅 感想文

小瀬 裕功

2025年3月8日、9日と日中文化振興事業団の企画で岡山への藩校をめぐる旅行に出かけた。今回の旅の目的は、日本の歴史に名を残す偉人たちの足跡を辿ることであった。最初に訪れたのは、池田光政によって創建された閑谷学校である。長い歴史を感じさせる講堂や石堀の佇まいは、静かな威厳に満ちており、教育にかける光政の熱意が伝わってくるようだった。特に、敷地内に立つ楷の木は、何世代にもわたり学問の精神を見守り続けてきたようで、心打たれた。

続いて、管茶山が開いた廉塾を見学した。しかし、残念なことに廉塾は工事中であり、建物の全容をじっくりと見学することは叶わなかった。それでも、地域の教育に尽力した茶山の志を感じ取ることができ、満足のいくひとときとなった。

夜は福山のホテルに宿泊した。夕食はホテル内のレストランで催された四川料理を囲んでの食事会であった。中国から易の勉強に来られている人たちと辛味の効いた料理に舌鼓を打ちながら、日中友好をテーマにした和やかなひとときを過ごした。異国の文化に触れながら、互いの理解を深めるこうした機会は、旅に彩りを添えるものだ改めて感じた。

翌日は高梁へ向かい、山田方谷資料館を訪れた。山田方谷は、江戸時代末期に備中松山藩の財政改革を成功させた名臣である。資料館には彼の遺品や書簡、改革に関する貴重な資料が展示されており、その才覚と誠実さに深く感銘を受けた。

次に日中国交正常化に尽力した岡崎嘉平太記念館を訪れる。戦後100回を超える訪中し国交正常化を成し遂げた情熱には感服した。

その後、岡山市内へ移動し、犬養毅の旧邸と旧岡山藩藩学跡を見学した。犬養毅が過ごした家には、質素ながらも品格を感じさせる佇まいがあり、政界で活躍した彼の人物を偲ばせた。旧藩学跡では、藩政期の教育のあり方に思いを馳せた。

今回の旅では、高速道路を車で往復し、移動距離も長かったため、身体的にはかなり疲れた。しかし、それ以上に、日本の偉人たちが残した偉大な業績に直に触れることができた充実感に満たされた。現代に生きる私たちが忘れてはならない精神や努力の大切さを改めて実感し、心豊かになる有益な旅となった。

最後にこの旅行を企画していただいた胡金定先生をはじめ若月様、車を出していただいた鴻原様、長時間運転していただいた増田様に深く感謝いたします。

胡金定先生とゆく「日中交流の絆と藩校の遺産の旅（岡山・福山編）」に参加して

若月 章

私にとって今回の旅は、5年前に新型コロナウイルス蔓延によって中止となった旅を必ず再開するとの執念に似た思いで企画・下見までして実現した旅でした。昨年の秋に行った湖北省を中心に三国志の赤壁の古戦場を中心にゆかりの地を回り、何より中国の多くの友と出会い歓談し貴重な体験

をすることが出来ました。今回は、岡山の胡金定先生のファンも駆けつけてくれたり中国からの参加者もあり日中交流の有意義な思い出を心に刻む事が出来ました。今回の旅を通して、学んだことは日本最初の公立学校「閑谷学校」をはじめ岡山という地が江戸時代から全国一の教育立国であったことを初めて知り藩主池田光政、その家臣津田永忠、備中松山藩の藩政改革を成し遂げた山田方谷、儒学者熊沢蕃山、菅茶山、頼山陽、そして五・一五事件の凶弾に倒れた犬養毅、日中友好に生涯を駆けた内山完造、岡崎嘉平太の功績を初めて知ることが出来ました。

特に印象に残ったのは、昭和初期に軍部の凶弾に倒れた「憲政の神様」犬養木堂が日本で初めて普通選挙を実施し、アジア主義を唱えアジア各国との友好を図り孫文とも友情を深めていたことであり、ジャーナリスト出身の政党政治を進めた方だったことなどほとんど知りませんでした。

また、特に興味を持って調べたところ、創価学会初代会長の「牧口常三郎と犬養毅」という研究資料を見つけ読みました（創価教育第11号 2018/3/16）。昭和5年11月18日が創価学会創立記念日ですが、教育改革運動として最初に発足した創価教育学会の支援会に多くの政治家、官僚、文化人の中に犬養毅、古島一雄、鳩山一郎、新渡戸稲造、柳田國男など28名がいたことを知りました。時の首相犬養毅は、そのわずか2年後の5月15日に軍部の青年将校に「話せばわかる」との名言を残し暗殺されてしまったのです。これ以降日本はどんどん軍国主義化し、満州に進出し日中戦争の泥沼に突入していった。このような状況の中で、創価学会は誕生した。1925年普通選挙法と引きかえに成立していたあの悪名高い「治安維持法・不敬罪」によって牧口常三郎、戸田城聖は投獄され牧口初代会長は獄死された。当時の殆どの宗教団体が軍部の弾圧を恐れ戦争協力していったが創価教育学会は弾圧を受けた数少ない宗教団体であった。戦後昭和20年からの戸田城聖第二代会長の戦いは小説「人間革命」そしてそのあとを受けた第三代会長池田大作先生の戦いが小説「新・人間革命」に詳述されています。図らずも今回の旅でこのことを思い起こしました。やはり旅での人との交流を通して思索し生命に刻んでいくことが本当に大事だと思いました。

胡金定先生と行く「日中交流の絆と江戸時代藩校の遺産の旅」岡山・福山編

2025. 3. 8～9 1泊2日 の旅に参加して

竹田 清美

胡金定先生と共に、歴史文化を辿る旅に出発！・・・参加された皆様は、日頃から日中文化交流について賢明な方々ばかりであれこれ知ることが色々ありました。

また、中国からおいでになった胡金定先生のファンのご友人4人が加わってワクワク、ドキドキしながら参加させていただきました。岡山には、これまであまり巡る回数も少なかったのも、良い機会だったと思いました。

特別史跡旧閑谷学校は、「日本遺産第1号認定」江戸時代前期に、岡山藩主池田光政によって創建、現存する世界最古の庶民のための公立学校を見学。現在岡山県青少年センターとして青少年健全育成に伝統を保護・継承されています。

日本の教育制度についてどのように開かれてきたのか、学校制度の歴史探訪に、国際的視野を持つ先達が、庶民の教育展望に尽力され雄渾の人が今の教育に継がれ拓かれていったということを再認識しました。

この藩校は、藩の次世代を担う藩士の子息への教育機関として、儒学や朱子学を中心とした漢学であったことなど、まるで大学ゼミの研究の旅のようでもあり、中国から参加メンバーの方々も交流を深めながら、多くの資料を見ておられました。有名な豆腐料理雲白豆腐店で昼食を取り、大阪では味わえない旅の醍醐味でした。

年齢に関係なく、学ぶことや知ること、また新たにもっと知りたい興味が湧く若者の気持ちになるものだと感じました。これは若返り法です！

また、現地の郷土愛深い、熟年ボランティア案内人の方々にも出会い、色々熱く語られ、教えていただきました。

ホテルの窓からライトアップした福山城が目の前に、最高の景色でした。藩校の歴史的軌跡を探る地に趣を向けて、日本の教育制度の歴史をたどりながら、中国文化の交わりに学び、その熱い尽力者により教育が促されたことを探求する旅でした。一般的に教科用図書の資料から習いますが、中国に渡り文化交流による儒学・朱子学の関りの重要性。国際的に視野を持つ先達が開いたことが、今に続く教育的歴史に思いを巡らせて、現代の営みに感謝し、さらに藩校の歴史から文化の発展について見聞を深め温故知新、現代の学びの至誠の在り方を探っていきたいと思います。皆様笑顔で無事に帰宅へと、大変ありがとうございました。

3号車は、熟年四葉マークを堂々と貼りながらも、無事終着に感謝でした。



岡山研修旅行レポート

増田 俊和

今回、岡山旅行に行って色々な所を見学しましたが、僕は2つの見学先が特に印象に残りました。まず1つ目は、特別史跡閑谷学校です。歴史ある学校であり、建物の造りや当時の状態のままでずっとある石などに凄くビックリしました。現代の技術でも造れるのか？と疑問に思う程、精巧に造られており、また接着方法にも関心がありました。僕も胡金定先生の授業を受けるまで、藩校の事はほとんど知らなくて、授業を受けて行く中で色々教えてもらいました。

この閑谷学校は1670年、岡山藩主池田光政によって、日本初となる庶民の為の学校であると学びました。僕は人間が学ぶことによって成長し、その知識をまた次の世代に伝えていき、時代時代を作ってきたのだと思います。

しかし1970年よりもっと前の時代では庶民は学ぶ機会すら無く毎日を過ごしていたのかと思うと凄く大変な時代だったのだなと思いました。

そして1670年、日本では初めてとなる閑谷学校を岡山藩主の池田光政が造ってくれた事により、庶民も勉学に励めるようになり、教養も身に付けていく事ができ、より良い時代を作ってきたのだなと思いました。

この日本初の閑谷学校を造ってくれた池田光政は本当に凄い人なんだなと思い、そして庶民でも勉強出来る事が(今では当たり前ですが)今でも続いていることに感謝して、閑谷学校を見学していました。歴史ある建物の室内に入るとヒヤッとして少し寒い感じが学校を連想させてくれましたのと、今の学校とは全然違う造りに凄くビックリして昔の学校は、こんな感じの造りになっていたのだなと勉強になりました。

そして2つ目は犬養木堂記念館です。

犬養毅の名前は知っていましたが、具体的に何をした人物か知りませんでしたので、とても勉強になりました。犬養毅について学んでいくと政党政治を打ち立てることに努力した、非常に優れた岡山県初の内閣総理大臣だと知りました。

小さい頃から漢学を学び、青年になり一人上京し慶応義塾に入り色々勉強され戦争当時の悲惨な体験もしており、それによって自分が政治の世界に入り日本をよりよくしていこうと思って活動していたのだと思いました。

また、日本だけでなく中国やフィリピンの独立運動にも支援していたなど外国との友好関係も築いており、本場に世界平和の為に努力されていた人物だと思い感動しました。

今日本はとても平和な国で勉強もでき、食べる物もあるのはこういう偉人たちがより良い国を作っていきたくて努力してきた結果が現代なのだと思います。

今回の岡山旅行で胡金定先生の授業内容の所を見学出来て、直に建物や資料に触れてみて歴史あるものについて本当に色々学ぶことができました。

旅行の2日間は良い天気で見学ができ、美味しいご飯も食べれて皆様と一緒に思い出を作れたことが本当に嬉しく思います。

泮池と玄関

中国十翼書院山長 米 鴻賓
翻訳 秦 爽

2025年3月8から9日の間に、私が日中文化振興事業団の「江戸時代の藩校遺産ツアー」（岡山、福山編）に参加できてとても嬉しく思います。

二日間ですが、私たちは旧閑谷学校、廉塾、管茶山旧宅、藩校誠之館跡、芳井歴史民俗資料館、内山完造生家跡、山田芳谷記念館、岡崎嘉平太記念館、犬養木堂記念館（生家）、旧岡山藩藩学跡などを見学し、これらの場所には、日中友好と儒学文化の発展に関する生きた事例として、その不朽の魅力を目の当たりにさせてくれました。素晴らしい収穫とともに、楽しく忘れられない思い出ができました。

日本最古の孔子を敬う名門校である旧閑谷学校では、岡山藩の藩祖池田光政が50年間の治世の間に築いた重要な文化遺産を学びました。池田光政は「儒道の興隆こそが天下の平和をもたらす」と信じ、儒学教育方針を強力に推進しました。その結果、西周（貴族院議員、学士会院院長）、大島圭介（日本の著名な外交官、工部大学校長、元老院議員、学習院院長）、文豪正宗白鳥（日本文化勲章受章者）、詩人三木露風など多くの漢学者、哲学者、外交官、文学者が輩出されました。池田光政の高い見識と教育の功績は、日本社会に永遠の智慧の指針と示範を提供し、当代においても深い影響を与えています。

旧閑谷学校を後にし、楽しい旅行の中で中国の四書五経などの古典の伝播行き渡る歴史的な痕跡をいくつも目にしました。それらは親しみや感慨を呼び起こしました。

岡崎嘉平太記念館では、さらに驚くべき心の衝撃を受けました。記念館がある市民広場は、なんと中国の四神文化に基づいて設計されていることが分かりました。広場の中央には四神図（奈良の四神館の図案と一致）があります。また、円廊の二階部分に応じて、順番に中国の羅盤の24山（方位）に対応する一一千支八卦、生肖図、甲骨文字が施されていて、これほど深遠な中国文化が市民活動の場に常設に展示され、継承されている様子を目の当たりにして、心から感動しました。

そして、最も印象に残ったのは、岡山市北区藩山町の旧岡山藩藩学跡でした。ここで、日本で唯一正確に保存されている泮池遺跡-岡山藩校の泮池を見ることができました。泮池は、中国周の時代の学宮で既に広く使われていた重要な存在です。かつて孔子は「文宣王」と称号を授けられ、孔子廟の大成門の正面には、規定により半月形の「泮池」が設けられている。

泮池については、中国の東漢時代の許慎の『説文解字』に明確に説明があります。「泮は諸侯が飡射のために設けた宮殿であり、西南には水があり、東北には壁がある。東門と西門の南側に水場があります。その場所は「諸侯宮宮」（教育の場）」と記されています。いわゆる「飡射」は宴会の席で、来賓と諸侯と一緒に弓矢を射る儀式であり、周の時代の最も一般的な儀礼の一つです。

周の『礼記・王制』には、「天子の学は辟廱、諸侯の学は泮宮」と記されており、つまり天子の太学の中央には学宮「辟廱」があり、その周囲には水が流れて四方を見渡せるようになっています。諸侯の学は「半天子之学」に過ぎないため、「泮宮」と称された。また、「泮宮の水は半ばのみ」（半円形の池）であることから、その池を「泮池」、すなわち「泮宮の池」と呼ぶようになった。辟廱は環状であり、四方を水に囲まれている。泮宮は半円形で、三方が水に囲まれている。泮池には通常石橋が架けられており、その形状はさまざまであるが、いずれも「泮橋」と称される。試験の際、学生は孔子廟（日本では「聖廟」と称される）に赴き、泮橋を渡って孔子を祭る。これを「入泮」と呼ぶ。また、古代において秀才が入学することを「游泮」、または「采芹」とも称した。『詩経・泮水』篇には「思樂泮水、薄采其芹……」その意味は、古代の士子たちが太学で在学中、泮池の水芹を摘み取り、帽子の縁に挿して文才を示したことを指す。一部の孔子廟では、池のほとりの煉瓦壁に「思樂泮水」の石刻を嵌め込んでいるが、その由来もここにある。隋唐時代に日中交流が深まるにつれ、日本は儒家文化を積極的に学び、「泮池」も伝わるようになった。特に江戸時代には、各地の藩校や郷学がその建築様式に取り入れた。

『説文解字』における「泮池」の解釈では、特に方位の配置を強調している—「西南に水があり、東北に壁を築く。東門と西門の南側には水がある。この場所を「諸侯の宮を営む（教育の場）」という。」ここには何か秘密があるのだろうか？ この問題を解決するには、『易経』の後天八卦の配列と「玄関」という言葉深く理解することが必要である。

まず、『易経』の後天八卦の配置では、東北の方位に対応するのは艮卦である。『易・説卦伝』には「艮は山なり」とあり、その形勢は高く盛り上がり、厚みがあり、気が漏れず、へこみがないのが望ましい。したがって、山・建物・壁があるのは吉であり、人丁（人口）が繁栄する。一方で、それと対称的な西南の方位には坤卦があり、『易・説卦伝』には「坤は地なり」とある。これは低く沈み、窪んでいることを意味し、水や低地が適しており、大衆に利益をもたらします。

この原理を理解すれば、中国の生態的智慧に基づく特定の法則が見えてくる。これこそが、『説文』が特に「泮池は西南に水があり、東北に壁を築く」と強調した理由である。そして、「東門と西門の南側」という位置は、震卦と巽卦が交わる処、および坤卦と兌卦が交わる処を指し、いずれも低く平坦であるべきであり、水があることが最も景観に適し、文昌（学問の発展）にとっても吉祥となるのである。

その次は、「玄関」と言う問題点であります。「玄関」とは何か？
中国古代において、「玄関」は特に重視されており、また古代の文献や文学作品においても頻繁に用いられる言葉であった。

例えば、以下のような詩がある。

- ・ 唐代・李白《春陪商州裴使君游石娥溪》：「蕭条出世表，冥寂閉玄関。」
- ・ 唐代・白居易《宿竹閣》：「無勞別修道，即此是玄関。」
- ・ 唐代・夏方慶《謝真人仙駕還旧山》：「逍遙堪白石，寂寞閉玄関。」
- ・ 唐代・羊士諤《小園春至偶呈吏部宴郎中》：「偃息非老圃，沉吟閉玄関。」
- ・ 唐代・岑参《丘中春卧寄王子》：「田中開白室，林下閉玄関。」
- ・ 清代・方文《東吳錦雯孝廉》：「恐人防静業，謝客掩玄関。」

……

これらの詩に共通するのは、「玄関」という言葉が「門」を象徴していることである。つまり、詩人たちは皆、「玄関」が門に関係していることを知っていた。しかし、実際にはすべての門が「玄関」と呼ばれるわけではなく、「窵（きょう）」の位置に開かれた門こそが「玄関」とされる。

「玄関」という言葉は、中国古代では「窵（きょう）」と呼ばれる。『説文解字』には、「空，窵也。从穴，工声。」と記されている。天地万物にはそれぞれ「窵（きょう）」があり、「玄関」とは天地の気とエネルギーが貫通する道筋、すなわち「生と死の関門」であり、人間の口や鼻のように決して塞がれてはならないものである。

「玄関」の位置は、『易経』の先天八卦図と後天八卦図の循環変化の法則に基づいて導き出される。そして、建築の向きが異なれば、それに応じた「玄関」の位置も変わる。中国古代の建築家たちは、建物の方位に従い、先天八卦と後天八卦の配列の原理を活用して「玄関（窵）」の位置を推定し、その「窵」の位置に門を開いた。この門こそが「玄関」であり、「窵門」とも呼ばれる。この「窵」の位置に門を開くことを、古人は「開窵」または「通窵」とも称した。

「玄関」の位置は、『易経』の先天八卦図と後天八卦図の循環変化の法則に基づいて導き出される。そして、建築の向きが異なれば、それに応じた「玄関」の位置も変わる。中国古代の建築家たちは、建物の方位に従い、先天八卦と後天八卦の配列の原理を活用して「玄関（竅）」の位置を推定し、その「竅」の位置に門を開いた。この門こそが「玄関」であり、「竅門」とも呼ばれる。この「竅」の位置に門を開くことを、古人は「開竅」または「通竅」とも称した。

このようにして生まれた「竅門」「開竅」「通竅」といった言葉は、単なる比喻ではなく、本来は建築と風水の原理に基づいた概念であった。それは、人々の迷いを解き、無知を打破する知恵の象徴でもあった。中国古人は、「玄関を開けば、財（才）の気が自然に入ってくる」と言った。唐代の高僧・司馬頭陀禅師は『玄関同竅歌』の中でこう詠んでいる。

“知妙道，玄関一決為至要；識真情，玄上天机竅上分……吾今数語吐真情，不誤世間人！”

「妙道を知るには、玄関の一訣こそ至要なり。

真の理を識るには、玄の天機、竅の分かれ目にあり……

吾、今ここに真情を吐露す、世の人を誤らせることなかれ！」

また、元代の李清庵も、「玄関の一竅は最も理解が難しく、心伝を得ざれば妄りに行うべからず」と強調している。

このことから分かるように、「玄関」という言葉を知っているだけで、その真意を理解せずに、単なる門やその内側の空間を「玄関」と称するのは誤りであり、誤った伝承が広まる原因となっている。実際に、現在「玄関」の推理方法を正しく理解している者は極めて少なく、多くの人があらゆる出入口を「玄関」と称する混乱が生じている。

中国の生態環境に基づいた知恵の中で、晋代の大学者・郭璞は「風水の法は、水を得ることが最も重要である」と述べている。建物の向きが異なれば、それに対応する「玄関」の位置も異なり、その場所に水があったり、風通しが良い（門を開ける）と、その建物の運勢や文化の発展に良い影響を与えるとされている。例えば、世界的に有名な高級リゾートホテル「アマン（AMAN）」の中国・上海にある「養雲アマン（養雲安縵）」の設計において、私は主門を「玄関」の位置に開くよう提案した。そして、数少ない古宅別荘の庭園にも、それぞれの「玄関（竅）」の位置に井戸を配置した。その結果、養雲アマンは2018年の開業からわずか2年で、アマン・グループ全体の成長率ランキングで世界一となる快挙を達成したのである。

以上の内容を理解した上で、中国古代の学宮に関する「西南に水を設け、東北に壁を築き、東門と西門の南側に水を設ける」という言葉を読み解くのは容易になります。

南向きに建てられた建築環境において、西南の方角は「玄関」の一つであり、この位置に水を配置したり、門を開いたり、道を設けたりすることで、文昌の気を大いに高めるとされています。そして、学校こそが最も文昌の気を必要とする場所です。そのため、「泮池」の配置には深い理が込められています。

さらに視野を広げてみると、岡山藩校の泮池の位置は、岡山市立岡山中央中学校の西南に位置しています。この学校もまた、名が高く、文運隆盛の地と知られている。その奥深さは、言葉では表し尽くせません。

以上の理論を総合すると、中国古代学宮とその泮池の配置に秘められた知恵をより深く理解することができます。このような書香の恩恵は、文運を高め、知恵を深める上で計り知れない功德をもたらすものです。

最後に、日中文化振興事業団の素晴らしい活動に感謝し、今後も皆様と共にさらに多くの学びを深めていけることを楽しみにしています。

この文が少しでも皆様にインスピレーションを与えることを願っております。



江戸時代の武士

太平の世において戦闘員としての役割が減り、幕府や藩を支える「公務員」のような行政官の役割が中心となりました。主な仕事は役所での執務、城や城下の警備、そして藩政の運営であり、藩士は能力に応じて様々な役職に就きました。彼らの生活は身分によって異なり、俸禄（給料）で生活する者もいれば、領地を持つ大名もありました。

行政官としての役割は役所で執務を行う「役方」が中心となりました。また、主な仕事は警備、財政管理、行政関連の雑務など、多岐にわたる公務を担いました。その役職は大目付（藩士を監察する役職）や裏判役（藩の財政を統括する役職）、家老次席など、藩政の中枢に関わる役職もありました。

軍事的な役割は戦がなくなったため、軍事的な役割は警備が中心でした。領内の警備、城内の警備、門番など。

その他の役割として、専門的な技術を持つ「家業」（儒学者、医師、御用絵師など）もありました。下級武士の中には、俸禄だけでは生活が苦しく、内職をしていた者も多くいました。

江戸時代の武士の身分と生活について、

- ①身分の多様性：大名や幕臣（旗本、御家人）などの階級がありました。
- ②大名・旗本：領地や役職によっては、比較的裕福な生活を送る者もありました。
- ③御家人：俸禄が低く、内職で生計を立てる者も多くいました。

生活の特徴：

- ①現代の会社員のように、朝に出勤し夕方に帰宅する生活でした。
- ②一部の大名などを除いて、生活は質素でした。
- ③下級武士の生活は、庶民の生活とほとんど変わらない貧しさだったといわれています。

勤番武士の生活

- ①参勤交代：大名の参勤交代で江戸に詰める「勤番武士」は、単身赴任のような生活を強いられました。
- ②生活の制限：外出が制限され、門限も定められていました。
- ③余暇の過ごし方：囲碁・将棋、読書、歌舞伎見物、吉原遊郭への訪問などが楽しみでした。
- ④貸本屋の利用：本が高価だったため、貸本屋で本を借りていました。

江戸時代の教育は、武士階級向けの**藩校と庶民向けの寺子屋**が二大機関でした。藩校は読み書き、儒学、兵学など高度な教養を身につける場で、寺子屋は読み書き算盤などの実用的な内容が中心でした。どちらの機関も、個人の進捗や家業・将来の進路に合わせて指導する方式が取られ、庶民の識字率が高い世界的な教育水準を支えました。

武士階級の教育：藩校

藩校の役割：各藩が設置した教育機関で、武士の子弟が対象でした。

藩校の目的：統治者として必要な教養を身につけること、幕府の学問の中心であった昌平坂学問所の模範を受けて、学問を奨励・振興すること。

藩校の教育内容：儒学、兵学に加え、幕末には洋学や西洋医学なども加わりました。

後世への影響：廃藩置県後、明治時代の学制における中等・高等学校の母体となり、維新後の近代日本建設の担い手を輩出しました。

庶民の教育：寺子屋

役割：庶民向けの教育機関で、現代の学校教育の源流とされています。

特徴：

自由な雰囲気：義務教育ではなかったため、入門は自由でした。

実用的教育：読み書き算盤が基本で、merchantや百姓にとって実用的な内容が重視されました。

個別の指導：現代のような一斉授業ではなく、子ども一人ひとりの進捗や理解度に合わせて個別に指導しました。

教科書：「往来物」と呼ばれる手紙集や、家業に合わせた教科書が用いられ、その種類は7000種にも及ぶと言われています。

社会性の育成：知識の習得だけでなく、礼儀作法や道徳といった「しつけ」や「人間形成」も重視されました。

江戸時代の教育の全体像

教育水準の高さ：鎖国下にもかかわらず、識字率が非常に高く、世界でも有数の識字率を誇りました。

多様な教育形態：藩校や寺子屋の他に、郷学、私塾など多様な教育機関が存在しました。

学問の中心：幕府が学問の中心としていたのは儒学で、特に朱子学が重んじられました。